アンブロアズ・パレ全集
フランス語版からの和訳

大村敏郎

日本医史学雑誌第三十一巻一号
昭和六十年一月三十日発行
昭和五十九年十二月二日受付

はじめに

小川鼎三先生に初めて声をかけていただいたのは、私が「アンブロアズ・パレの生地を訪ねて」というテーマで日本医史学会例会に発表した時だった。フランス留学中に体験した一人旅の想い出であるが、わが国では初めてアンブロアズ・パレ（Ambroise Paré, 1510？～1590）の故郷を紹介することになった。(1)

あれ以来十年になるが、パレに関して総会や例会に発表する際には小川先生がいつも聞いて下さり、温かく励まして下さったものだった。今回、先生の追悼論文を書くに当たってパレをはずしたテーマは思い浮ばなかった。それも外から見たパレ論ではなく、パレの書き残した全集そのものに挑戦したいと考えた。この書物がオランダ語に訳されて渡来し、日本の外科さらにはもっと広く日本の西洋医学の魁となるわけであるから、小川先生が専攻された蘭学史のルーツに迫ることになる。

昨年十月末に、ほんの一部ではあるが、パレ全集のフランス語版からの和訳という事業に参加して出版することが出来た。これが小川先生の生前におみせすることが出来ず、追悼論文のテーマにしかならなかったことを大変残念に思う次第である。

パレ全集の日本への普及

「解体新書」(一七七四)が本格的な翻訳をされた西洋医学書としてよく知られており、蘭学にとっては金字塔である。しかし、それ以前の西洋医学書をもとにしたものとしては、外科では「紅夷外科宗伝」(一七〇六)、「金創跌撲療治の書」(一七三五)、「外科訓蒙図彙」(一七六七)などがある。諸家の研究[2]でこれがアンブロアズ・パレの全集によるものであることが知られている。ただし、これらは翻訳というにはあまりに内容が原著と自由に離れ、省略され、他の要素が加わったものでありすぎるのである。蘭書解禁以前の時代であるという事情があることも否定は出来ないが、むしろこう考えるべきであろう。すなわち、翻訳という考え方が確立していない時代であるから、誰が書いたどの本をもとにしたとも書かず、有益なことを書きとめて解説しまとめたものであればよかったのである。当然原著の構成をそのまま伝える気はなかったと考えれば納得がいくのである。

その後わが国においてパレ全集の翻訳はされなかった。日本にパレ全集が渡来したのがすでに原著が書かれてから百年ほど遅れている。以後時代と共に新しい外科に書きかえられて臨床的意義がうすれていったからであろうと思われる。もう一つ考えられることは書物になり、あるいは巻物になったパレの外科絵図を至上のものとして改良を加える努力がされなかったのかもしれない。とにかくパレ外科絵図の巻物は蘭方医の宝物として秘蔵され各地に広まっていたことは事実である。

今、この原著に当るパレ全集フランス語版を翻訳してみても臨床にすぐ役立つことが得られるとは考えないが、それがどのようなものであったのかを知り、西洋の近代外科を開き、日本の外科の源流にもなったアンブロアズ・パレという十六世紀のフランス人外科医の存在を身近に感じ、技のルーツを求めることは決して無意味ではないと考えたのである。

マルゲーニュのパレ全集完全本

一昨年の秋、野間科学医学資料館が入手したジョゼフ・フランソア・マルゲーニュ（Joseph François Malgaigne, 1806～1865）編集の「アンブロアズ・パレ全集完全本」[3]について、蔵書紹介を兼ねて私はパレについて書いたことがある。

マルゲーニュの本は完全本と呼ばれ、一八四〇～四一年に三冊本として世に出た。これはパレの原著とはいくつかの点で異なっているのであるが、一応パレの全集を網羅したもので、解説・注釈を加え、外科史上そして医学史上におけるパレを再評価し、その意義を定着させたものである。医学の狭い分野だけでなく、文化としての意義を拡めることに成功した書であるといっても言いすぎではない。このことを考慮に入れると、マルゲーニュの数々の医学的な業績の中で最大のものではないかということなどを含めて、私は三回連載をしたのであった。[4]

その中で、もう一人の人物を加えて三人の人物が三つ巴になっていることも指摘した。近代外科の父パレの全集を十九世紀の大外科医の一人マルゲーニュが再評価した。マルゲーニュによってアカデミーの席上、負の評価をされたのが皮下注射器の父と呼ばれているシャルル・ガブリエル・プラバーズ（Charles Gabriel Pravaz, 1791～1853）であった。そのプラバーズが生れた町ポン・ド・ボーボアザンは以前は国境の町で、その国境に当るギエール川に作ったばかりの橋を渡ってトリノ遠征に出かけたフランス王フランソア一世（François I, 1494～1547）の軍にパレが従軍して鉄砲傷の軟膏療法を開発することになるのである。プラバーズの生地を訪ね、その業績を調べているうちに、パレとは時代は異なるが地理的に、マルゲーニュとは同時代で学術的に、それぞれに接点を持っていることに気づいたのである。もちろんパレとマルゲーニュの関係は知っていたが、その書物を手にしたのは野間資料館からの依頼がきっかけであった。

十八世紀の医学界の変化

パレの全集（一五七五）は出版当時パリの医学界から非難をあびた。パレの生存していた時代には学術用語のラテン語

で書かれていないこと、そして医学部の教授の指導も協力もなしに作られたものであることがその理由であって、内容についてはパレが現場で自ら手を下した体験に基くものを書いたのであるから、古典の文献にしがみついていた保守的な医学部出身の医師達にはそれを覆すほどの力はなかったのである。

この本はフランス語医学書の初期のものでその需要が高く、ラテン語・オランダ語・ドイツ語・英語などに次々に訳が出版され、版を重ねヨーロッパを風靡することになるのである。唯一の例外がパリの医学部であった。この事情を知っていると、パリの医学部の外科教授であるマルゲーニュがパレを取上げたことで大転換が起きたように思えるかもしれないが、この間に外科医の地位も医学部の体質も以前とは違ったものに変っていたのである。

すなわち、上下の関係にあって対立をつづけていた内科医と外科医の地位が、一六八六年のルイ十四世（Louis XIV, 1638～1715）の痔瘻手術の年をきっかけにして、一七三一年に王立外科アカデミーの創立があり、一七五〇年頃には内科医・外科医がほゞ対等になり、フランス革命で医学部も外科学校も廃止される。一七九五年にエコール・ド・サンテとして再出発すると内科・外科が同じ場で教育をうけるようになって、一八〇八年から医学部の名が復活するといった経過がある。(5)

二世紀半も時代の離れたパレの外科がそのまま続いて臨床に役立つはずもなく、一八四〇・四一年のパレ全集復刻はパリの医学部に対するパレ外科の勝利というのではなく、外科史上のパレの意義の定着であると考えている。外科医による外科史という点ではフランスではマルゲーニュがその先覚者である。

マルゲーニュの注釈がついたことによって、ルネサンス期の外科が生々とよみがえり、特に十九世紀の第一線の外科医の目と、パレの数々の文献や版を重ねた全集を見くらべた書誌学研究者としての目でみたパレ外科にじっくりと取組むことが出来ることを私は指摘したのであった。

ラバルの町のパレの立像

マルゲーニュ本の巻頭にはパレの立像が画かれている。これを見た時の私の驚きと喜びは大変なものであった。なぜならそれは私がパレの生地――現在はブール・エルサン村ではなくラバル市に合併吸収されている――その市役所前の広場で見上げたあの立像だったからである。

澄みきった秋の青空の下で、パレは顎に片手を当てて、ややうつむき加減に立っていた。十六世紀後半に特有の丸い襟飾りのついた服装を身につけていた。像に向って右後に書物が積重ねられ、それに火縄銃がたてかけてあった。あの出会いの日のことが思い出されたのである。

この像は当時の有名な彫刻家ダビッド・ダンジェー（David d'Angers, 1788～1856）の作によるもので、他にグザビエ・ビシャー（Xavier Bichat, 1771～1802）やドミニク・ラレー（Dominique Larrey, 1766～1842）の像も作っている。前者はパリ大学の旧医学部正面のアンブロアズ・パレのレリーフの真下に、後者はバル・ド・グラスの軍事病院の教会の前にある。

マルゲーニュの三冊本の一冊目には近いうちにパレの像が生地に建つと予告してあり、三冊目には再びマルゲーニュの序があって、その中に除幕式の模様が記載されている。一八四〇年はアンブロアズ・パレの没後二五〇年に当り、この年に記念の像が立ち、マルゲーニュの復刻も行われたのである。

今回の和訳出版への経過

私が科学医学資料研究に書いたこの文に目をとめた我部正彦氏はパレとマルゲーニュという外科領域の二大人物に魅せられて、その年の春マルゲーニュ本の初版を入手された。氏は日本医史学会の会員で、柔道接骨師として活躍中である。この絵図の多い三冊本を手にして、専門の領域である骨折と脱臼の部分だけでも読みとりたい、それがわが国の整骨に与

えた影響を考えて広く知らせたいと情熱をもやしたのである。

東京都柔道接骨師会がこれを事業として取り上げ、訳者として友清・久保嶋両氏を得、一方マルゲーニュ本との出会のきっかけになり、度々パレについて発表をしていることから私に協力の要請があった。私にこれをお断りする理由がない。パレのフランス語からの翻訳は本邦はじめてのことであり、誰でも読めるようになるという意義の大きさ、先に述べた我部氏の情熱、さらに現場の医療を担っている人々――パレの時代の床屋外科医に通じるものがある――の会がこれを事業として取上げたという見識に敬意をはらって、この出版事業に飛び込んだのである。

私のわがままが聞きいれられて、マルゲーニュのさらりとした現代風の外科絵図に並べて、パレの原著にある古典的な雰囲気の絵を採録し、さらに日本に伝わる手描きの絵図の一部を「紅夷外科宗伝」から取らせていただいた。これには武田科学振興財団杏雨書屋と長崎大学図書館医学部分館の御協力がある。

もう一つ一昨年、適塾で見かけたパレのオランダ語版が日本に渡来した最初の版と同じく一六四九年アムステルダムのシッペル版であることが判明したが[6]、その扉のページを掲載することによって西洋と日本のパレ外科の接点を明らかにすることも出来たのである。

マルゲーニュの注がついているから本文の中にわずらわしい現代の注釈をつけることはやめにして、本書を読む人々への手引きとして、その時代背景や注目してほしい点などをまとめておいた。

パレの骨折篇・脱臼篇[7]

訳を完成させて感じたことを書きとめておきたい。

パレは近代外科の父といわれ、パレの発見・開発・普及した業績はかなり語りつがれているが、原著に当ってみると決して古典を度外視しているのではなく、ヒポクラテスやガレヌスの医学が相当多く引用されている。したがってパレの目

で見た古典医学を見なおせることも興味あることである。

マルゲーニュ本では第二冊目に納められている第十三篇が骨折、第十四篇が脱臼である。パレの原著では第十五篇・第十六篇になっており、マルゲーニュが配列を変えたことがわかる。

骨折・脱臼はパレの処女出版である一五四五年の「火縄銃その他による創傷治療法」以来、一五四九年の「接骨法つき簡潔解剖」、一五六一年の「一般解剖」、一五六四年の「外科十巻」、一五七二年の「外科五巻」、さらに一五七五年の「全集」初版、一五七九年の二版、一五八五年の四版と度々書き換えられている。医学史上に名を残す人物は多いが、パレほど沢山の文献を残し、その間に進歩や変化がみられるのは珍しいことである。マルゲーニュは書誌学的な目でこれらを追っている。

この領域でパレの目立つ業績としては大腿骨の頸部骨折の最初の記載がされていることである。マルゲーニュによれば全集の初版に初めて出てくることで、パレの文献に限らず他の文献にも見られないことだという。

反面、現代では極く稀だとされる成人の股関節脱臼に多くのページをさき、器具を使った治療法の図を二つも画いている。

骨折・脱臼に関して使用されている絵図は骨折に四図、脱臼に十九図が描かれている。肩関節の脱臼には十図が費されている。ただし一図は一五八五年の四版にはないが一五七五年の初版から再録したものだとマルゲーニュは書いている。

パレを代表する有名な絵図は特徴ある曲り方をしたバーを使った肩関節脱臼整復法である。この図は正確にオランダ語版に伝えられて日本に到達しているが、わが国で最初に写される時に図の足許に画かれていたバーの詳細図を書きおとしてしまったので、すべての日本の絵図には姿を見せない。肩関節整復のために腋窩に当てる布の詰め物の細工がパレの考案であるのに、それが伝わっていないことになる。

なお、パレはこのバーを使用する際には、患者より背の高い男が二人で患者の腋窩に通したバーを担げと指示している。日本の絵図からはこの雰囲気が伝わらないが、直接関係のなさそうな華岡青洲の正骨法の図の中に膝を折り曲げて縛った患者の腋窩に丸太棒を通してつり上げ治療しているのがあり、パレの意図が伝わっていることになる。

骨折篇は三十二章、脱臼篇は六十二章に分れている。骨折篇の第二十三章にはパレ自身が下腿の骨折をしたことが記録されている。左の脛首と腓首を二本とも折っており、合併症を起して苦労する。しかし患者の立場で骨折を体験することによって、パレはその対策を講じ、医療を拡げていくのである。

和訳上の問題点

マルゲーニュが完全本を作るために使ったパレ全集は一五九八年の第五版であるらしい。本文の注釈の中に出てくる最も後期の版がその年だからである。弁明と旅行記というパレの心意気をよく伝える文章が加わったのは一五八五年の第四版からで、これがパレの生前の最後の版である。

出版元は初版から四版まではガブリエル・ビュオン（Gabriel Buon）で、第五版はビュオン未亡人、一六〇七年の第六版は息子のニコラ・ビュオン（Nicolas Buon）に代る。四版が一ページに五六行なのに、五版は一ページに五八行と詰めた分だけページ数が少なく一二二八ページになっている。四版は一二四五ページであった。このようにパレ全集の体裁が整ったのは一五八五年であり、今年が丁度四百年に相当するのである。

四百年前の原文は古典的な十六世紀フランス語で書かれている。したがって文字や綴りも現代と異なり普通の辞典ではこなしきれないのである。また言葉の持つ定義が今と同じではない。フランス語として医学用語がまだ確立していない部分もある。上腕のことを avant-bras（前腕）としたり、肘を coude でなく coulde と書いたりしている。

当時の医学の知識が現代とかけはなれているから現代の常識で訳すとおかしな理解を生む恐れもあり、わかりにくい部

分は素朴な訳にして、当時の医療の味わいを消さぬように心掛けた。

難物は薬の処方である。適当な訳の見つからない場合もあり、見つかっても同じ品物を表わしているとはいいきれない場合もあるので、一部を残して省略することにした。このように多少の問題は残るが、とにかくパレ外科の四百年という区切りに間にあわせることには成功した。

この第四版のパレ全集が出た一五八五年の五年後、一五九〇年十二月二十日、アンブロアズ・パレは生涯を終えるのである。パレの没後四百年を記念する行事の先駆けとして、今回の和訳出版が少しでも役立てば幸いである。そんな願いをこめて副題に「外科の源流をたずねて」という名をつけた。

おわりに

今回の和訳本には一五八五年の版と一八四〇年のマルゲーニュによる完全本の版の扉のページをそのままのせてある。どちらもフランス語である。また装丁については、白地に青い文字、そして赤いリボンを添えておいた。この三色は床屋のねじり棒にヒントを得たものではなく、その名も知られることなくわが国に受け入れられ、蘭国外治の方と考えられていたアンブロアズ・パレの国籍がフランスであり、その医学こそが日本で最も効力を発揮した最初のフランス文化であったことを伝えるためのフランス国旗の三色のつもりである。そしてこの三色は、はるばる大海を渡って東洋までとどけてくれたオランダの国旗の色でもあるからである。

（慶応義塾大学医学部医史学研究室）

文献

(1) 大村敏郎　アンブロアズ・パレの生地を訪ねて　日本医史学会雑誌　二十三巻三号　一九七六
(2) 岩熊　哲　外科宗伝とパレ外科書との比較研究　医史学論考　一九四三

(3) J. F. Malgaigne: Oeuvres complètes d'Ambroise Parè: Baillière, 1840～41
(4) 大村敏郎　マルゲーニュ編集のアンブロアズ・パレ全集をめぐって　科学医学資料研究　百五・百七・百八号　一九八三
(5) 大村敏郎　ルイ十四世時代の医療事情　日仏医学　十七巻　一号　一九八四
(6) 大村敏郎　適塾にあるアンブロアズ・パレ全集について　適塾　十六号　一九八三
(7) 大村敏郎監訳・東京都柔道接骨師会訳　アンブロアズ・パレ骨折篇・脱臼篇（外科の源流をたずねて）　東京都柔道接骨師会（連絡先電話〇三・八一五・〇八一一）　一九八四

Traduction de français en japonais d'Oeuvres d'Ambroise Paré

Toshiro OHMURA

Les oeuvres d'Ambroise Paré, traduits en hollandais, sont arrivées au Japon comme le premier livre de la chirurgie occidentale en vers 1670.

Ce livre n'existe pas maintenant, mais mes recherches recentes confirment qu'il a été l'édition Schipper d'Amsterdam en 1649.

《Kôi-geka-soden》(par Chinzan Narabayashi en 1706) est le nom du livre de Paré, traduit de hollandais en japonais. Dans ce livre on ne peut trouver ni nom de livre original ni nom de son auteur. En ce temps-là au Japon on était interdit de lire des livres occidentaux en raison de l'antichrestianisme.

Mais la technique de Paré et ses tableaux chirurgicaux ont été acceptés au Japon au XVIIIe siècle, et ils devaient l'origine de la chirurgie japonaise. La chirurgie de Paré est donc la première culture française qui a eu de l'efficacité au Japon.

Cette année, l'Association des Thérapistes Judo-Orthopédiques de Tokyo (Tokyo-to Judo Sekkotsushi-Kai) a accompli la traduction directe de français en japonais des Livres des Fractures des Os et des Luxations par Ambroise Paré avec les notes de J. F. Malgaigne.

Dans ce livre, les tableaux de Paré et ceux de Malgaigne s'arrangent avec ceux du Japon qui sont en couleur dans《Kôi-geka-soden》.

En étudiant l'origine de l'art, nous voulons dire Merci à Ambroise Paré à l'occasion de son 400e anniversaire.